

〔資料〕

自閉症スペクトラム障害の子どもと母親の コミュニケーションに関する国内文献レビュー

山本 真実¹⁾ 浅野 みどり²⁾

要 旨

本稿の目的は、自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder:ASD) の子どもと母親のコミュニケーションに関するわが国における先行研究をレビューし、今後、看護研究が探求できる視点について検討することである。

医学中央雑誌Web (ver.4), CiNiiを用い、「コミュニケーション」「母親」「子ども」「母子関係」「自閉症」「自閉症スペクトラム」「広汎性発達障害」をキーワードとし、1983年から2010年までに発表された文献を検索した。収集された文献は131文献であり、ASDの子どもと母親のコミュニケーションを関係性という視点から検討した文献、コミュニケーションの背景や文脈 (context) を含め検討した文献は少数であった。

その後、131文献のうち、ASDの子どもと母親のやりとり、やりとりに対する母親の経験を取り上げた14文献を抽出した。これらは、情動的コミュニケーション、社会的相互反応の変化、また母親の子育ての経験や子どもの分かり方などについて探求しており、子どもと母親、そして背景や文脈 (context) を含めた幅広い視点から検討していた。また支援として、情動的コミュニケーションに注目した支援、子どもの行動に対する母親の見方を変えること、日常的な環境に注目することなどを挙げていた。

ASDの子どもと母親に対し、それぞれの生活と個々の特徴に合わせた支援を行うため、親子のコミュニケーションのユニークなスタイルとその意味に注目することが重要である。そして日常生活における親子の自然なコミュニケーションは、関係性、コミュニケーションの背景や文脈 (context) を含め、今後、さらに検討される必要があり、それは、親子や家族に対し、生活という視点をもって関わる看護が探求できる視点である。

キーワード：自閉症スペクトラム、コミュニケーション、家族看護、母子関係、相互作用

1. はじめに

発達障害者支援法は、発達障害の早期発見と発達支援、自立と社会参加といった生活全般にわたる支援を図ることを目指し、2004年12月に成立した¹⁾。これを受け、医療、保健、福祉、教育、労働などに関わる幅広い分野から取り組みが進められている。

自閉症は、1943年にKanner, L., 1944年にAsperger, H.によって報告された²⁾。その後1980年代には、アメ

リカ精神学会が作成した診断基準に自閉症グループの上位概念として広汎性発達障害 (pervasive developmental disorders:PDD) が明記されるようになり、Wing, L. によって自閉症の診断基準を部分的に満たす子どもがいること、特に言語障害が非常に軽微なグループが自閉性類似の1つの症候群として考えられることが報告され³⁾、自閉症とその周辺の子どもの達が広域にわたって存在すると考えられるようになった。1990年代に入ると、現在用いられている代表的な診断基準が作成される。世界保健機構による疾病分類ICD-10は1992年に作成され、アメリカ

1) 名古屋大学大学院医学系研究科 博士課程後期課程

2) 名古屋大学大学院医学系研究科

カ精神学会によるDSM-IVは1994年、DSM-IV-TRは2000年に作成された⁴⁾。近年では、自閉症とその周辺は、知的レベルや症状の程度についての広がりや広範で連続体を示すことから、自閉症スペクトラム障害 (autism spectrum disorder: ASD) と考えられるようになってきている⁵⁾。

わが国において、発達障害という概念は、発達の遅れが明らかな障害を意味するものとして用いられてきたが、2000年ごろから、注意欠陥多動症候群、高機能自閉症、アスペルガー症候群などの一連の障害をまとめる概念としても認識され始めた⁶⁾。発達障害者支援法は、わが国において発達障害を初めて位置づけた法律である。また2007年4月の改正学校教育法の施行により、ASDの子どもも対象となる特別支援教育が法的に位置づけられた⁷⁾。すなわちわが国においては、2000年以降、ASDの子どもと家族に関わる法律が施行され、ASDは社会的に知られるようになり、ASDの人々や家族に対する支援体制は急速に整えられている。このような中で、ASDの子どもに対する一般的な対応は明らかにされつつあり、今後は、ASDの子どもと家族に対し、それぞれの生活や個々の特徴を重視した支援が求められる。

自閉症の子ども達とのコミュニケーションには不思議さと繊細さがある。例えば、積極的に関わろうとする人からはスルスルスリと逃げて行くのに、ただ座っている知らない人の膝にちょこんと座ったり、周囲には全く関心がないように見えても、その場の雰囲気の変化を敏感に察知したりする。こういった彼らのコミュニケーションの不思議さや繊細さに対し、母親は違和感や悩みをもちながら、子どもに対する気付きをジグソーパズルのように組み合わせ、親子独自のやりとりで子どもとつながっていく⁸⁾。

ASDの子どもと母親のコミュニケーションは、これまで多くの研究により検討されてきた。コミュニケーションは、変化に富んだ動的なものであり、様々な側面を併せ持つ。そのためコミュニケーションを検討する視点は、研究によって様々である。看護は、生活の支援という視点からASDの子どもと母親およ

び家族と関わる。そこで生活という視点から親子のコミュニケーションを検討することは、それぞれの生活や個々の特徴を重視した支援のため看護においても必要となる。

本稿では、先行研究を概観し、今後、看護研究が取り組むことができる視点について検討する。子どもと母親のコミュニケーションは、子どもとのコミュニケーションにおける親の経験や価値観、また文化や社会的な状況など、コミュニケーションの背景・文脈 (context) と影響し合う。そのため本稿においては、わが国における文献を取り上げる。また父親と母親には子どもとのコミュニケーションに関する経験の相違があると考え、本稿では、特にASDの子どもと母親のコミュニケーションについて検討する。

II. 研究目的

本稿の目的は、ASDの子どもと母親のコミュニケーションに関するわが国の先行研究をレビューすることである。さらにASDの子どもと母親のやりとり注目した研究を取り上げ、研究デザイン、報告されたコミュニケーションの特徴、支援についてまとめ、看護研究が探求できる視点について検討する。

III. 研究方法

1. 文献の収集と分析方法

1983年から2010年までの期間に発表された文献を、医学中央雑誌Web (ver.4)、CiNiiを用いて検索した。キーワードとして、「コミュニケーション」「母親」「子ども」「母子関係」「自閉症」「自閉症スペクトラム」「広汎性発達障害」を組み合わせ用いた。収集された文献は、重複した文献を除き352件であった。そこから会議録、特集、解説を除き、さらに成人のみを対象としている文献、思春期に特有の問題を取り上げた文献、ASDの子どもと母親のコミュニケーションに直接関連がないと思われる文献を除く

と131文献になった。

131文献を概観するため、文献の内容により分類した文献マップを作成し、そして発表年による推移をグラフに示した。文献マップは、各文献がコミュニケーションを検討した視点に注目し、類似性により分類しながら作成した。まとまりの内容を表現しトピックとして【 】に記した。またトピック内についても、可能な場合には分類し、そのまとまりを表現しサブトピックとして〈 〉に記した。そしてトピックあるいはサブトピックの下に、該当した文献の内容を示した。文献マップ作成にあたり John W. Creswellの著書⁹⁾にある文献マップを参考にした。発表年による推移は、ASDの診断基準の変化、法律の施行などASDの子どもや家族をとりまく社会や環境の変化などを考慮し、1980年代を1つのまとまりとし、1990年以降5年ごとに文献数と内容をまとめた。ただし経年的な推移を概観するため、2010年については2005年以降の区分に含めた。

以上により131文献を概観した後、特にASDの子どもと母親のやりとりに焦点をあてた文献を抽出した。抽出にあたり、文献マップにおいて注目したトピック、サブトピックに色をつけた。

2. ASDの子どもと母親のコミュニケーションの考え方

コミュニケーションの研究は、哲学、言語学、心理学、社会学、人類学など多岐にわたる学問領域で行われており、それぞれの学問領域によって概念や定義は様々である。看護学においてコミュニケーションは、個人の内的経験をシンボル化して伝達し、相手がその意味を再現して認知する過程を相互に連続的にないし動的に繰り返すことで、人間の相互関係を成立、発展させる過程¹⁰⁾としている。また心の温かさをお互いに感じあうこと¹¹⁾、人と人とが共通の場、状況の中で、ふれあい、かわり合う営み¹²⁾とも表現されている。人と人とのコミュニケーションを情報の伝達だけでなく、情緒的な触れ合いやかわりに及ぶ多様なメッセージの交換¹³⁾と考えてい

る。

本稿においては、ASDの子どもと母親のコミュニケーションを、相互作用であり、影響し合うものとする。そして子どもと母親が伝え合うメッセージ、生じる意味、コミュニケーションの背景・文脈(context)を含めコミュニケーションを考える。

IV. 結果

1. 収集した文献の概要

1) 内容の概観

収集した131文献について文献マップを作成した(図1)。収集した文献は、以下の3つのトピックに大別された。子どもと母親のコミュニケーションにおける子どもの特徴に注目した【ASDの子どもの特徴に関する文献】、子どもと母親の反応や気持ちのやりとりに注目した【ASDの子どもと母親のやりとりに関する文献】、そしてコミュニケーションを含め子育てという視点から、母親の経験や気持ち、子育ての状況や支援について検討した【ASDの子どもをもつ母親の子育てに関する文献】であった。

【ASDの子どもの特徴に関する文献】は、〈ASDの子どもの反応とその傾向〉と〈ASDの子どもの主観〉に分類できた。〈ASDの子どもの反応とその傾向〉に注目した文献では、ASDの子どもの共同注視機能、愛着行動のパターン、話しかけ方の特徴などについて研究されていた。共同注意という視点からは、生後18ヶ月において、自閉症の子どもの方が定型発達の子どものに比べ共同注意が少ないこと¹⁴⁾、愛着の視点からは、他の障害児群に比べ俊着の成立が遅れるが、俊着行動は認められること¹⁵⁾¹⁶⁾が報告されていた。〈ASDの子どもの主観〉に注目した文献では、ASDの子どもの体験やQOLについて検討されていた。

【ASDの子どもと母親のやりとりに関する文献】では、ASDの子どもと母親の関係性という視点から、ASDの子どもと母親の間には接近・回避動因的葛藤をめぐる悪循環があること¹⁷⁾¹⁹⁾が報告されていた。

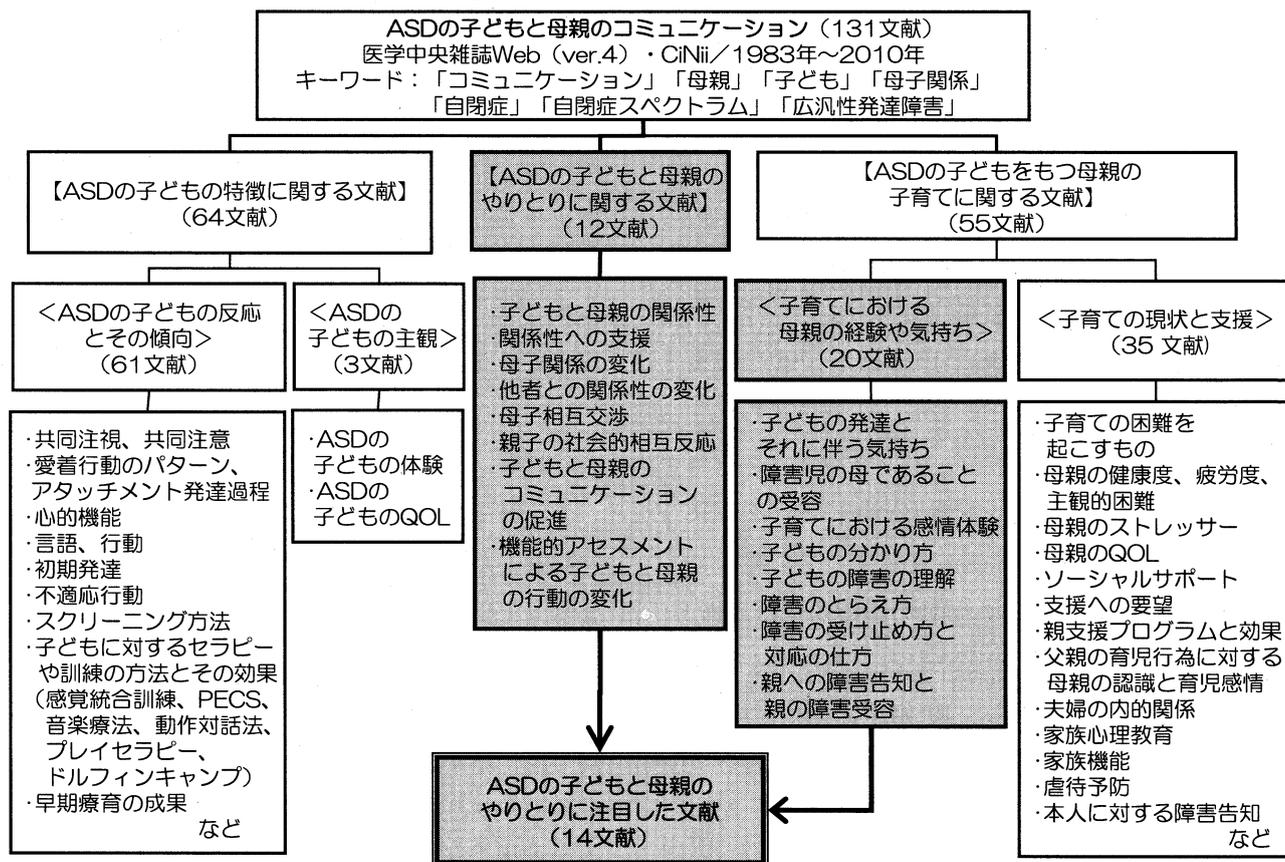


図1. 文献マップ

また母親と子どもの双方を視野に入れ、治療やセラピーを行い、その中で、子どもと母親のやりとりの変化、子どもに対する母親の気持ちの変化について検討していた。日常生活における親子のコミュニケーションを取り上げた文献は少なかった。

【ASDの子どもをもつ母親の子育てに関する文献】には、<子育てにおける母親の経験や気持ち>に関する文献、<子育ての現状と支援>に関する文献があった。<子育てにおける母親の経験や気持ち>に関する文献は、親の子育てのプロセスや気持ちの変遷、子どもの分かり方、障害の捉え方などについて検討していた。障害受容や障害認識に関する研究も数多く報告されていた。<子育ての現状と支援>に関する文献では、子育てにおける困難感、ストレス、QOL、ソーシャルサポート、家族機能に関する文献があった。

2) 経年変化

収集された131文献の経年変化とその内容をグラ

フに示す(図2)。ASDの子どもと家族をとりまく社会の状況はめまぐるしく変化している。1980年代には広汎性発達障害という概念が登場し、1990年代には現在の代表的な診断基準が作成された。そして2000年代に入ると、わが国ではASDの人々や家族に関わる法律が施行され、ASDに対する社会的な認識が高まった。

ASDの子どもと母親のコミュニケーションに関する研究は、1980年代に6文献、1990年～1994年に5文献が発表されていた。1995年～1999年には12文献が発表され、そのうち7文献が1999年に発表されており、1999年を境に文献数は急増していた。2000年～2004年には29文献、2005年～2010年には79文献が発表されていた。

発表された文献の内容を、文献マップ(図1)の分類を用いて経年的に概観する。1980年代、1990年代には、コミュニケーションにおけるASDの子どもの反応とその傾向に焦点があてられていたが、1995

年以降、ASDの子どもと母親のやりとりに関する文献やASDの子どもをもつ母親の子育てに関する文献が散見されるようになった。2000年以降は、ASDの子どもをもつ母親の子育てに注目した研究は増加し、子育てにおける母親の経験や気持ち、そして家族にも関心が寄せられるようになった。さらに障害告知や障害認識といったテーマも見られるようになった。2005年以降には、研究の視点は広がり、ASDの子どもの主観に焦点をあてた研究も行われ始め、2008年以降には、本人への障害告知に関する研究も行われていた。

2. ASDの子どもと母親のやりとりに注目した文献の概要

子どもと母親のやりとりに関する先行文献について検討するため、収集した131文献から14文献を抽出した(表1)。抽出した文献は、文献マップ(図1)の中の【ASDの子どもと母親のやりとりに関する文献】、そして<子育てにおける母親の経験や気持ち>のうち、特に子どもとのやりとりに対する母親の経験や気持ちを取り上げている文献とした。

1) 抽出した文献の研究目的

抽出した文献は、ASDの子どもと母親の情動的コミュニケーション、子どもと母親の相互作用や関係性に注目した治療やセラピー、教室などの効果、社会的相互反応の変化、ASDの子どもと母親の関係性からみた問題行動の成因と治療、について検討していた。また母親の子育ての経験、子どもに対する気持ち、子どもの分かり方について探求していた。

2) 抽出した文献の研究デザイン

子どもと母親のコミュニケーションに対する研究者のかかわり方は、文献により様々であった。多く見られたかかわり方は、研究者が定期的、継続的に治療やセラピー、トレーニングを実施し、その中で子どもと母親のコミュニケーションを検討しているものであった¹⁷⁾⁻²⁸⁾。山崎²⁹⁾は、「共同療育者」「支援される者」という想定された枠組を離れ、日々の「育てる」営みの中で子どもの分かり方の内実を描くという立場から検討していた。また関根²⁸⁾は、家

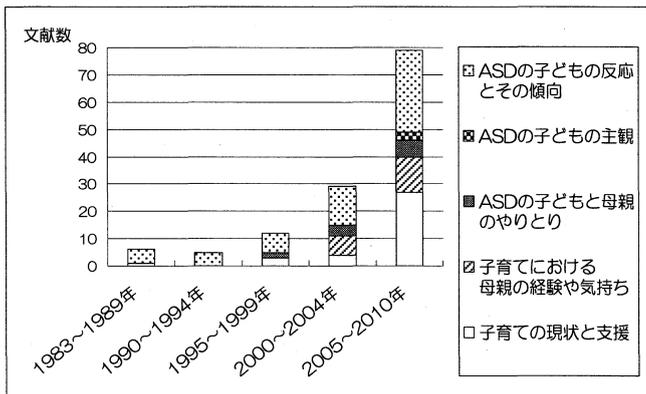


図2. 文献数の経年変化とその内容

庭を訪問し養育者の主体性を尊重して関わることにより、クライアントとセラピストの関係が、対等で相互主体的なものに変化したと述べていた。

研究方法としては、ASDの子どもと母親の行動の観察、母親へのインタビュー、フィールドワークが行われ、研究対象者・研究参加者は1組から4組の親子であった。用いられたデータは多岐にわたり、子どもと母親の行動や雰囲気に関する詳細な記録、母親の子どもに対する思い、子どもとのやりとりに対する母親の感想や気づき、これまでの子育てにおける母親の経験、母親自身のエピソードがデータとして含まれていた。その場に居合わせた人の行動や雰囲気といった、コミュニケーションが行われる場に関する記述を含む文献²⁹⁾もあった。さらに研究者の心情や気持ちの変化、研究者と母親の考えの相違、研究者と母親の関係を含めて検討している文献²³⁾²⁸⁾²⁹⁾もあった。ASDの子どもと母親のコミュニケーションは子どもと母親だけではなく、子どもと母親の生活、母親の子育てにおける経験、子どもに対する母親の気持ち、そして研究者自身やその場の状況、といった子どもと母親を含む全体的な視点から検討されていた。データの分析は、子どもと母親のコミュニケーションの変化や特徴、母親の考え方の変化、子どもと母親にとっての治療期間の意味、研究を通じて得た研究者の変化、研究対象者と研究者の関係、といった視点から行われていた。またコミュニケーションの質的な側面は、質的データを量的データに変換した分析、あるいは質的データをそのまま質的

表1. ASDの子どもと母親のやりとり注目した文献の概要(発行年順)

発行年	筆頭著者	研究目的	研究デザイン		子どもと母親のコミュニケーション
			対象者と特徴	データ収集方法と注目したデータ	
1996	小林隆児 文献17)	母子の関係性の様相と治療的介入後の母子の関係性の回復過程を検討し、自閉症の治療的介入を関係性の問題として捉えることの意義を検討する。	2歳前に折れ線現象を呈して発症した自閉症児と母親、1組	遊戯室における治療セッションの記録。子どもと母親の行動、子どもと母親のやりとり、子どもの障害や夫婦関係に関する母親の気持ち。	<ul style="list-style-type: none"> 母子交流が深まると共生的ともいえるほどの母親への愛着行動の深まりが顕在化する。 母子交流が深まるにつれ情動的コミュニケーションが活発に展開するが、母親が安心できる存在として機能しなくなると、情動的コミュニケーションは破綻。 母親の子どもへの関与は、子どもの意欲に添って雰囲気盛り上げていく質へと変化し、子どもは母親の雰囲気に引き込まれていくかのように模倣行動を示す。
1997	小林隆児, 他 文献18)	情動的コミュニケーションの成立過程における養育者の内的表象の果たす役割を検討する。	母子間のコミュニケーションが成立しにくい自閉症児、常動反復行動、言語発達の遅れがある子ども2名とその母親、2組	大学内Mother-Infant Unit (MIU)におけるセッションの記録。子どもと母親の行動、やりとりの悪循環、母親の子育ての不安と母親自身のエピソード。	<ul style="list-style-type: none"> 子どもは母親への接近欲があるが、母親がそれに気がつかず子どもの期待とはずれて働きかける。 接近・回避動因の葛藤の悪循環がある。
2000	笹川えり子, 他 文献20)	自閉症児とダウン症児を対比し、動作法におけるトレーナーとの相互交渉の変化が母子間の相互交渉にどのような影響を及ぼすのかを検討する。	母子相互交渉が成立しにくい自閉症の子ども2名、ダウン症の子ども2名とその母親、4組	動作法キャンプにおけるビデオ録画記録と記述による記録。相互交渉(子どもと母親の遊び方のパターン、言語的コミュニケーション行動のパターン)、母親のキャンプ後の感想。	<ul style="list-style-type: none"> 子どもとトレーナーとの相互交渉の変化が母子相互交渉にも反映される。 ダウン症児と比べると自閉症児における他者への始発的関わりへの促進は難しい。
2000	篠倉敏彦, 他 文献21)	母子間の相互交渉に及ぼす動作法の効果を探る。	母親との相互交渉が難しい自閉症の子どもと母親、1組	動作法キャンプにおけるビデオ録画記録と記述による記録。子どもの動作法への反応、相互交渉(子どもと母親の遊び方のパターン、やりとりのパターン)、子どもと母親の行動、母親のキャンプ後の感想。	<ul style="list-style-type: none"> 動作法が進むと、母親が誘った遊びに対して、母親からの誘いを何回も受け止め、やりとりが継続できる遊びが増加。相互の笑顔が見られるなど、共有した遊びが多く成立。その後、自己表現をうかがわせる反応が見られる。
2002	小林隆児, 他 文献19)	乳幼児期に自傷を呈した自閉症児を取り上げ、自傷の成因と治療について論じる。	ことばの遅れ、自傷のある子どもと母親、1組	大学内MIUにおけるセッションの記録。子どもの行動特徴、子どもと母親の行動、母親と子どものやりとり、母親の子どもに対する気持ち。	<ul style="list-style-type: none"> 母親への愛着欲求が高まった時に自傷が誘発。 葛藤状態を打破する契機は、子どもの愛着欲求を明確化し、保障する関与である。
2003	小林隆児, 他 文献22)	ADHD、PDDなどの子どもたちを対象とした関係障害臨床実践で得た知見から介入のあり方を検討する。	ADHDの子ども1名、PDDの子ども1名、自閉症の子ども2名とその母親、4組	大学内MIUでのセッションにおける記録。子どもと母親の行動、母親と子どものやりとり、母親の育児にまつわる気遣いと気疲れ、母親の子どもに対する気持ち。	<ul style="list-style-type: none"> 育児にまつわる気遣いや気疲れが、子どもと母親のあいだの関係悪循環を生じさせやすい。 愛着をめぐる強い葛藤、接近・回避動因の葛藤がある。
2005	関根恵, 他 文献23)	「子どもの問題行動は親子の社会的相互反応の問題から起こっている」「親子の社会的相互反応は、親側の固定した子どものとらえ方を変化させることで変化する」「親の子どもの捉え方はVHTにより改善できる」という仮説を検証する。	自閉症であり重度精神遅滞の子どもと父母、1組	プレイ・セラピー場面のVTRを用い、自宅にてビデオ・ホーム・トレーニング(VHT)を実施した時のビデオ録画記録と母親が記入した記録。母親のVTRに対する感想と反応、母親の子どもに対する気付き、子どもと母親のやりとり、家族の関係性の変化、著者と母親の関係、子どもの行動に対する解釈の著者と母親のずれ。	<ul style="list-style-type: none"> 実施によりお互いが楽しんでいるという温かな情緒交流が感じられるようになった。 子どもの行動をコミュニケーション行動と捉えられるようになったことにより、相手の主体性を認められるように母親の子どもへの捉え方が大きく変化した。
2006	古市真智子 文献24)	母子心理療法(母子同席面接)における母子関係の変化を振り返るとともに、早期診断が母子関係に与える影響について検討する。	アスペルガー症候群と診断された子どもと母親、1組	母子同席面接における記録。子どもと母親の行動、母親の子どもへの捉え方、セラピストと母親の関係、セラピストの行動と心情。	<ul style="list-style-type: none"> C(子どもの名前)は、母親との一体の世界に他の人を入れる余裕ができ、癇癪が減っていった。 母親はC(子どもの名前)自身を見つめ、Cの母親としての自分を取り戻していった。
2006	樋口玲子, 他 文献25)	他者との関係性はどのように変化するかを音楽療法場面と日常場面から検討する。	自閉症の子どもと母親、1組	母子同室の個人音楽療法におけるビデオ録画記録と記述による記録。母親が記入した日常生活状況の記録。子どもの日常生活場面と音楽療法場面の言語発達(発話総数、発話の機能)、子どもと母親の行動。	<ul style="list-style-type: none"> 他者との関係性と言葉の発達は密接に絡みあい伸びる。 他者との関係から出てくることばを育むことが対人関係の世界を構築する上で重要である。
2006	吉岡恒生 文献30)	母親が記入する「気づき」の臨床的効果と「子どもの発達と母親の気持ちの変化」について検討する。	広汎性発達障害の子どもと母親、1組	プレイセラピーと同時に実施した母親へのカウンセリングにおいて、母親が記入した育児アンケート「気づき」(5つの質問項目・自由記述形式)と母親とのカウンセリング記録。	<ul style="list-style-type: none"> 子育てをめぐる感情を冷静に内省することで、自ら子育てのヒントを得ることができた。 同じ境遇の発達障害児の母親の前で自分を語ることが、仲間を抱えられているような感覚のなか、感情を吐き出す契機となり、子どもに対する見方にもプラスに影響。

表1. ASDの子どもと母親のやりとりに注目した文献の概要（発行年順）（つづき）

発行年	筆頭著者	研究目的	研究デザイン		子どもと母親のコミュニケーション
			対象者と特徴	データ収集方法と注目したデータ	
2008	永田雅子, 他 文献26)	広汎性発達障害が疑われる子どもと親を対象とした教室の意味と効果を報告し, 母親の育児支援における効果を検討する.	動きが多く落ち着かない子どもとその母親, 1組	母親に関する教室での記録. 子どもと母親の行動, 母親の子どもの特性の見方, 育児への気持ち.	これまで一方的になっていた自分の関わりに対して子どもの反応が返ってくることで, 育児の手ごたえを感じ始め, かかわりをお互いに楽しめるようになった.
2009	竹井清香, 他 文献27)	機能的アセスメントに基づく包括的な行動的支援の効果を評価. 介入場面における母子の行動の変化がどのように般化したのかを明らかにする.	自閉性障害の診断をうけ知的障害児通園施設に通う子どもと母親, 1組	自宅での機能的アセスメントに基づき母親と立案した支援計画, 実施中の観察記録とビデオ録画記録, 実施後の母親へのアンケート. 子どもの母親への関わり, 要求, 拒否, 母親の子どもへの行動(教示, 指示, 賞賛, 身体強化, 注意・叱責), 子どもの行動問題.	環境側が変わることによって, 子どもの行動問題ではない方法で正の強化を得る機会を増やすことができる.
2009	山崎徳子 文献29)	筆者と母親の「分かり方」を間主観的な把握に注目して検討し, 構造化のプログラムを行う背景にある親の心情を考察する. 「育てる」という枠組みの下で自閉症児への向かい方を検討する.	自閉症の子どもと母親, 1組 指導員と研究者	障害児学童保育における保育場面の観察と母親との対話の文章の記録, 対話の録音記録, 子どもが描いた絵日記. 子どもの他者に対する行動, 他者との関係, 著者への反応. 母親の子どもとの対話における声のトーン, しぐさ, 表情, そしてエピソードに対する感想, 学童保育の雰囲気, 著者の印象, 著者と子ども, 母親との関係, 学童保育における著者の気づき, エピソードに対する著者の感想.	<ul style="list-style-type: none"> 母親が構造化プログラムを用いる動機は, 子どもを分かりたいという心情であり, 子どものために何かをせずにはおれない母親の当たり前の心情である. 母親は自分の理解を超えた子どもの姿に接した時, これまでにない喜びを感じた. 子どもが用いた言葉は, 他者との関係性の中で起きていることを鮮やかに表現した.
2010	関根恵 文献28)	VTRを使用する際の工夫により, 低下していた母親としての自信と自発性の回復をサポートするための新しい方法としての有効性を報告する.	自閉症であり, 知的障害のある子どもと母親 1組	プレイ・セラピー場面のVTRを用い, 自宅にてビデオ・ホーム・トレーニングを実施した時のビデオ録画記録と繰り返しの視聴から母親が記入した記録. 母親のVTRに対する感想と反応, 子どもの行動への気づき, 子どもと母親のやりとり, 家族の関係性の変化, 著者と母親の関係, 子どもの行動に対する解釈の著者と母親のずれ.	<ul style="list-style-type: none"> 母子の関係性の問題へのアプローチにより, 母親はAちゃん(子どもの名前)の気持ちを代弁し, Aちゃんの行動に新たな意味づけを与えた. お互いに情動や意図が伝わる関係になった. 母親の自尊感情や自己効力感が回復し, 母親と子どもの関係性が改善し, 子どもの社会性の発達が見られた.

に分析する方法が用いられていた。量的データに変換した分析では、ビデオ映像などの記録から、遊びのパターン、コミュニケーションの始発のパターン、やりとりのパターン、発話と発話機能について数量化し、その増減やコミュニケーション全体に占める割合に注目し分析していた。質的な分析では、子どもと母親の行動、言葉、表情、そこに伴う気持ち、母親の子育てをめぐるエピソードを詳細に記述し、それを解釈しながら分析していた。

3) 報告されたASDの子どもと母親のコミュニケーション

ASDの子どもと母親のコミュニケーションとして、母親あるいは子どもの一方的な働きかけがほとんどであること²⁰⁾²¹⁾、子どもは母親への接近欲があるが、母親がそれをうまく読み取れないという悪循環¹⁸⁾¹⁹⁾²²⁾が報告されていた。そして子どもと母親のコミュニケーションは、治療やセラピー、トレーニングによっ

て徐々に変化していた。子どもの変化としては、母親に対し一緒にやりたそうな視線を送る²⁵⁾、母親の誘いを受け止め、やりとりが継続する²⁰⁾²¹⁾、相手の目を見て笑い、意図を伝えようとする²³⁾、母子交流が深まるにつれ子どもが愛着行動を示す¹⁷⁾⁻¹⁹⁾²²⁾などが報告されていた。そして母親は、子どもの意図や情動を言語で表現するようになり²³⁾²⁸⁾、子どもの動きに添って応じ¹⁸⁾¹⁹⁾²²⁾、子どもの意欲に添って雰囲気を盛り上げる¹⁷⁾ようになっていた。子どもと母親に笑顔が見られ²¹⁾、親子が顔を見合わせて笑い合う場面など、お互いが楽しんでいるという温かな情緒交流が感じられ²³⁾、情動を共有するコミュニケーションへと発展したことが報告されていた。この情動を共有するコミュニケーションは、母親が安心できる存在でなくなることで破綻する危険があり、ASDの子どもと母親の微妙な関係のなかで成り立つとされていた¹⁷⁾。

上記のような子どもとのコミュニケーションに対し、母親たちは、初めは子どもの行動に対する焦燥感を持ち¹⁸⁾、何をするかわからないので目が離せない²⁷⁾と感じていた。しかしその後、徐々に子どもへの愛情を言葉で表現するようになり、子どもが何をしてもらいたいかわかる¹⁸⁾、子どもと気持ちが通じる¹⁹⁾、子どもの反応が増えたことで接していて楽しい²⁶⁾と感じるようになっていた。

子どもと母親のコミュニケーションの変化に関わることとして、子どもの行動についての新たな気づきを境に、母親が子どもの対人行動を捉えられたこと²³⁾、母親の関わりによって発達してきたと思える子どもが、母親の理解を超えて大きく飛躍する姿に、子どもの質的な変化を感じ、感動し、その時の子どもの気持ちに自分の気持ちを重ね合わせたこと²⁹⁾、アスペルガーの子どもを育てているのではなく、C(子どもの名前)を育てている感覚を取り戻すこと²⁴⁾が報告されていた。このことから、子どもの行動についての新たな気づきや、母親の理解を超えた子どもの姿に接する機会、たった一人のその子として育てる感覚を取り戻すことが、母親と子どもの関係を変化する契機となることが推察される。

4) 提案された支援

ASDの子どもと母親のコミュニケーションに対する支援として、小林¹⁷⁾¹⁹⁾²²⁾は、人間の発達を関係性の中で捉え、援助を行うという姿勢を強調し、情動水準の体験を共有する情動的コミュニケーションに注目した支援の必要性を述べている。関根²³⁾²⁸⁾は、子どもの行動に対する親の読み取りを変化することで、親子の社会的相互反応が変化するとしている。そして適切な読み取りはセラピストが教示するものではなく、母親が子どもの行動をコミュニケーション行動と捉えられるようになることにより、母親の子どもの捉え方が変化すると考察している。相互交渉の体験を支援すること²⁰⁾²¹⁾、問題行動ではなく日常的な環境側に働きかけること²⁷⁾の必要性も検討されていた。母親に対する支援としては、子育てをめぐる感情を内省し、親が素直に泣き、怒り、悲しみ、喜

ぶことができること³⁰⁾が挙げられていた。

これらから、子どもと母親の情動的コミュニケーションに注目した支援を行うこと、子どもの行動に対する母親の考え方の変化を促すこと、子どもが相互交渉の体験の機会をもつこと、日常的な環境に着目すること、そして母親が感情を内省し、安心して気持ちを話せる場を用意することが支援として挙げられる。

V. 考 察

1. ASDの子どもと母親のコミュニケーションを探求する視点

これまでASDの子どもと母親のコミュニケーションは、コミュニケーションにおけるASDの子どもの特徴、ASDの子どもと母親のやりとり、ASDの子どもをもつ母親の子育て、といった視点から検討されてきた。コミュニケーションにおけるASDの子どもの特徴に関する文献は多数あったが、ASDの子どもと母親のやりとりに焦点をあてた文献は少数であった。コミュニケーションは相互作用であり、子どもと母親のコミュニケーションを検討する際には、子どもと母親の双方を視野に入れ、子どもと母親のやりとり、生じる意味やその変化、関係性に注目する必要がある。また母親の子育てに関する経験や子どもに対する思い、母親自身の親とのコミュニケーションに関する経験、家族、周囲の人々や環境などといったコミュニケーションの背景や文脈(context)を含め、相互に作用し合うシステムとしてASDの子どもと母親のコミュニケーションを検討する視点が求められる。またコミュニケーションに伴うメッセージや意味、背景や文脈(context)は、親子によって異なりユニークである。ユニークさに注目し親子のコミュニケーションを探求することは、親子ごとのコミュニケーションの多様さを明らかにする。それは十人十色の特徴をもち、全体的な傾向からは見えにくいASDの子どもと母親のコミュニケーションを探求するため、今後、特に求められる視点である。

ASDの子どもと母親のコミュニケーションの検討には、親子および家族をシステムとして考え、生じる意味や背景・文脈(context)を視野に入れること、ユニークさに注目することが求められる。そしてこれらの視点は、人と人のコミュニケーションを、人間の相互関係の成立や発展の過程であり、情緒的なふれあいやかかわりに及ぶ多様なメッセージの交換であるとする看護におけるコミュニケーションの考え方と重なる。また家族はユニークな存在であるという前提をもち、家族を1つのシステムとして考え、家族全体を視野に入れながら家族内のサブシステムに働きかけるという家族看護の視点とも重なる。看護という視点からASDの子どもと母親のコミュニケーションを検討する意義は大きい。

2. 生活という視点から関わる看護が探求できること

看護は、あらゆる健康状態の人々に対し、ホリスティックな視点をもって生活の支援を行う。看護という考え方からASDの子どもと母親のコミュニケーションを描くことは、診断の有無にとらわれない幅広い視点から、子どもと母親のコミュニケーションを検討することにつながる。また日常生活に溶け込んだ親子のコミュニケーションや、親子が工夫しながら築いた親子独自のコミュニケーションを探求する機会となり、これらは看護が貢献できる視点である。

吉岡³¹⁾は、インタビューの中で、母親たちが、子どもの発達障害を客体としてではなく、かけがえない個性をもつ主体として子どもを語っていると報告している。また山崎²⁹⁾は、支援するという枠組みから離れ、日々の「育てる」営みの中における子どもの「分かり方」の内実を描いた。子育てにおいてASDという見方が常に存在するのではなく、母親はその子をそのまま感じながら子育てをしている。子どもと母親の日常的で自然なコミュニケーションを検討するためには、親子のコミュニケーションを親子の見方で知ろうとする姿勢が必要となる。看護は、長期にわたり親子や家族と関わり、子育てにおける出来事や思いについて親子や家族と話し、一緒に考

え、子育ての伴走者としての役割を担う。支援する人と支援される人にとどまらない関係の中で、親子や家族の見方でコミュニケーションを知ろうとし、親子の日常的で自然なコミュニケーションを検討することが可能である。

幅広い視点から親子の生活に溶け込んだコミュニケーションを考えること、子育ての伴走者として日常的なコミュニケーションをその親子の見方で知ろうとすることは、ASDの子どもと母親および家族のより充実した生活のため、看護研究が探求できる視点である。

〔受付 '11.02.08〕
〔採用 '11.10.26〕

引用文献

- 1) 厚生労働省：発達障害者支援施策，検索日2011.1.27，<http://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/hattatsu/index.html>
- 2) 平井信義：小児自閉症の発見とその後の文献の展望，小児自閉症，21-70，日本小児医事出版社，東京，1968
- 3) 杉山登志郎：歴史的展望，(杉山登志郎，辻井正次)，高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症，3-14，ブレーン出版，東京，1999
- 4) 石崎朝世：増加する発達障害と診断基準の関係及び必要な対応，(日本発達障害福祉連盟)，発達障害白書2011年版，27-28，日本文化科学社，東京，2010
- 5) 橋本俊顕：自閉症の診断をめぐる問題点，(五十嵐隆，平岩幹男)，小児科臨床ピクシス発達障害の理解と対応，46-51，中山書店，東京，2008
- 6) 平岩幹男：発達障害とは，(五十嵐隆，平岩幹男)，小児科臨床ピクシス発達障害の理解と対応，2-3，中山書店，東京，2008
- 7) 湯汲英史：年表，(日本発達障害福祉連盟)，発達障害白書2009年版，159-163，日本文化科学社，東京，2008
- 8) 山本真実，門間晶子，加藤基子：自閉症を主とする広汎性発達障害の子どもをもつ母親の子育てのプロセス，日本看護研究学会雑誌，33(4)：21-30，2010
- 9) John W. Creswell／操華子，森岡崇訳：研究デザイン—質的・量的・そしてミックス法，43-45，日本看護協会出版会，東京，2007
- 10) 内菌耕二，小坂樹徳(監)：コミュニケーション，(粟屋典子，遠藤實，小林登他)，看護学大辞典・第四版，726，メヂカルフレンド社，東京，1994
- 11) 斎藤美津子：ヒューマン・コミュニケーション，(南裕子，馬場一雄，前川正，他)，看護とコミュニケーション，1-6，金原出版，東京，1986

- 12) 添田啓子：コミュニケーション，（日本小児看護学会），小児看護事典，268-269，へるす出版，東京，2007
- 13) 野嶋佐由美：家族内コミュニケーション，（南裕子，馬場一雄，前川正，他），看護とコミュニケーション，38-42，金原出版，東京，1986
- 14) 大神英裕：共同注意と乳幼児健診－発達障害の早期発見に関するコホート研究－，乳幼児医学・心理学研究，17(1)：69-81，2008
- 15) 伊藤英夫：自閉症児のアタッチメントの発達過程，児童青年精神医学とその近接領域，43(1)：1-18，2002
- 16) 高橋正泰：母子関係の心理アセスメント－愛着行動に関する検討－，リハビリテーション心理学研究，30：15-29，2002
- 17) 小林隆児：自閉症の情動的コミュニケーションに対する治療的介入－関係性の障害の視点から－，児童青年精神医学とその近接領域，37(4)：319-330，1996
- 18) 小林隆児，白石雅一，石垣ちぐさ，他：乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象，乳幼児医学・心理学研究，6(1)：9-20，1997
- 19) 小林隆児，竹之下由香，船場久仁美，他：自閉症にみられる自傷の成因と治療をめぐって，精神科治療学，17(8)：1025-1031，2002
- 20) 笹川えり子，小田浩伸，藤田継道：ダウン症児・自閉症児とその母親との相互交渉に及ぼす動作法の効果，特殊教育研究，38(1)：13-22，2000
- 21) 篠倉敏彦，小田浩伸，富永良喜：自閉症児の母子相互交渉に及ぼす動作法の効果，発達心理臨床研究，7：39-52，2000
- 22) 小林隆児，小林広美，船場久仁美，他：育てにくい幼児に対する早期介入について，東海大学健康科学部紀要，8：81-88，2003
- 23) 関根恵，中野茂：ビデオ・ホーム・トレーニングを用いた自閉症児とその母親のコミュニケーションの促進，北海道医療大学心理科学部研究紀要，1：31-38，2005
- 24) 古市真智子：痼癪が激しく母親に過度に密着する男児の母子同席面接過程，治療教育学研究，26：21-29，2006
- 25) 樋口玲子，吉岡恒生：早期療育としての自閉症児への音楽療法－対人関係性の発達論的視点から－，治療教育学研究，26：47-56，2006
- 26) 永田雅子，岡嶋美奈子：地域における広汎性発達障害児と親への早期介入の試み－親の育児支援における効果の検討－，小児の精神と神経，48(2)：143-149，2008
- 27) 竹井清香，五味洋一，野呂文行：機能的アセスメントに基づく自閉症スペクトラム幼児とその母親に対する家庭内支援－注目によって動機づけられた行動問題への効果－，障害科学研究，33：13-24，2009
- 28) 関根恵：ビデオ・ホーム・トレーニングを用いた自閉症児とその母親への面接過程，心理臨床学研究，28(4)：412-422，2010
- 29) 山崎徳子：自閉症児の母親はいかに子どもを「分かる」か－対話から探る 自閉症児への向かい方－，応用心理学研究，34(2)：182-192，2009
- 30) 吉岡恒生：言葉の遅れを主訴とする広汎性発達障害児への母子発達支援－子どもの発達と母親の気持ちの変化を追って－，治療教育学研究，26：11-19，2006
- 31) 吉岡恒生：発達障害者の思春期－母親から見た発達障害者－，愛知教育大学教育実践総合センター紀要，12：61-68，2009

Communication between Mothers and Children
with Autism Spectrum Disorder Literature Review in Japan

Mami Yamamoto¹⁾ Midori Asano²⁾

1) Doctoral Course, Graduate School of Medicine, Nagoya University

2) Graduate School of Medicine, Nagoya University

Key words: Autism spectrum disorder, Communication, Family nursing, Mother and child relationship, Interaction

The present study reviewed the Japanese literature on communication between mothers and children with autism spectrum disorder (ASD) and proposes several important research topics for the future. I conducted a search through ICHUSHI Web (Ver.4) and CiNii of publications between 1983 and 2010 using the keywords “communication”, “mother”, “child”, “mother and child relationship”, “autism”, “autism spectrum disorder”, and “pervasive developmental disorders”, recovering 131 articles. This revealed that research focused on the relationship between mother and child or upon their social context is very limited in Japan. Focusing

on exchanges between the mother and child, as well as on the mother’s experience of those exchanges, we chose 14 articles which dealt with affective communication, social interaction, maternal experience with child rearing, and how mothers understand their children. These articles assumed a more holistic perspective than is typical, and suggested that the emphasis should be on emotional communication, changing maternal attitudes towards the child’s behavior, and paying attention to the everyday environment in designing support strategies. The importance of paying attention to the unique styles and experiences of the mother and the child in order to enhance individual support of mothers with ASD children, each of whom has a different personality, was stressed. The implication of the literature review is that we should further examine natural communication between the mother and the ASD child in everyday life in order to provide nursing support that is appropriate for the lives of those who are being supported.